

十字架の言葉



2026年7月11日 第2課

「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、
神の力である」

(1 コリント 1:18 口語訳)



2026年7月11日 第2課
十字架の言葉

「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」

(1 コリント 1:18 新共同訳)

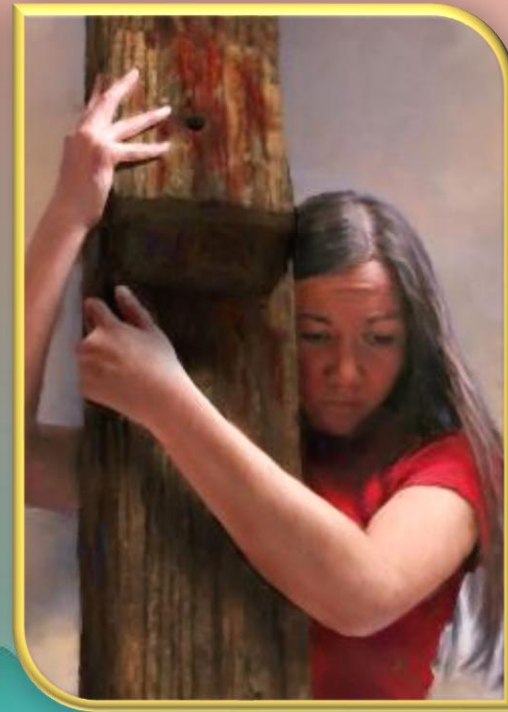


2026年7月11日 第2課
十字架の言葉

1コリント 1：1～31節では、十字架が人々の生活にどのような影響を与えるかについて語られています。

信者にとって、十字架は救いの象徴です。しかし、1世紀に生きていた人々にとって、十字架は犯罪者の恥ずべき死を象徴するものに過ぎませんでした。

十字架上で死んでから復活された方によって救われた？ 人間にとっては、それは愚かであり、無意味であり、弱さである。しかし、聖霊の呼びかけに心を開いた私たちにとって、十字架は「神の力、.....知恵、義、聖化、そして贖い」である。
(I コリ 1:18.30)



十字架の福音

滅んでいく者にとっての愚かさ

救われる者にとっての力

十字架につけられたメシア

神の力、神の知恵であるキリスト

十字架の福音

召された者自身にとっては、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の力、神の知恵たるキリストなのである。
(1 コリント 1:24)

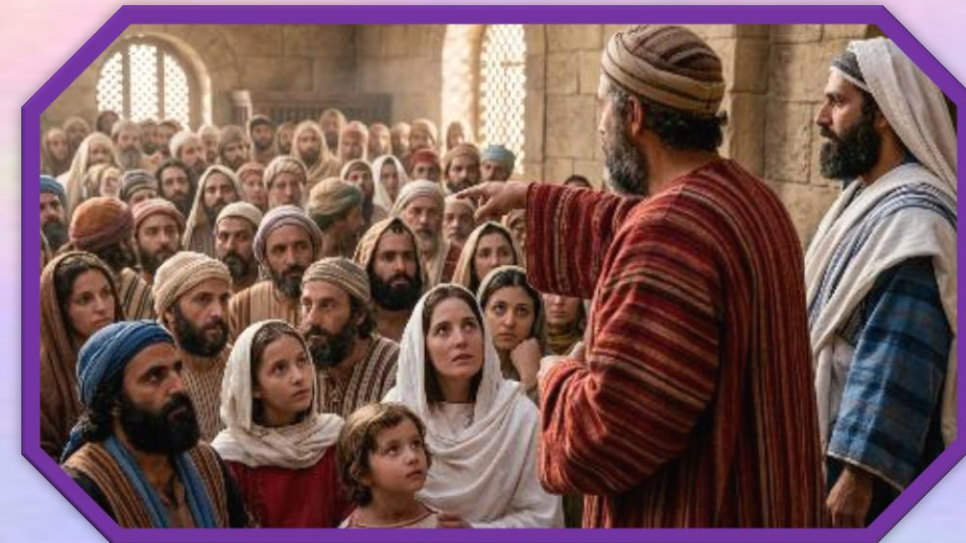
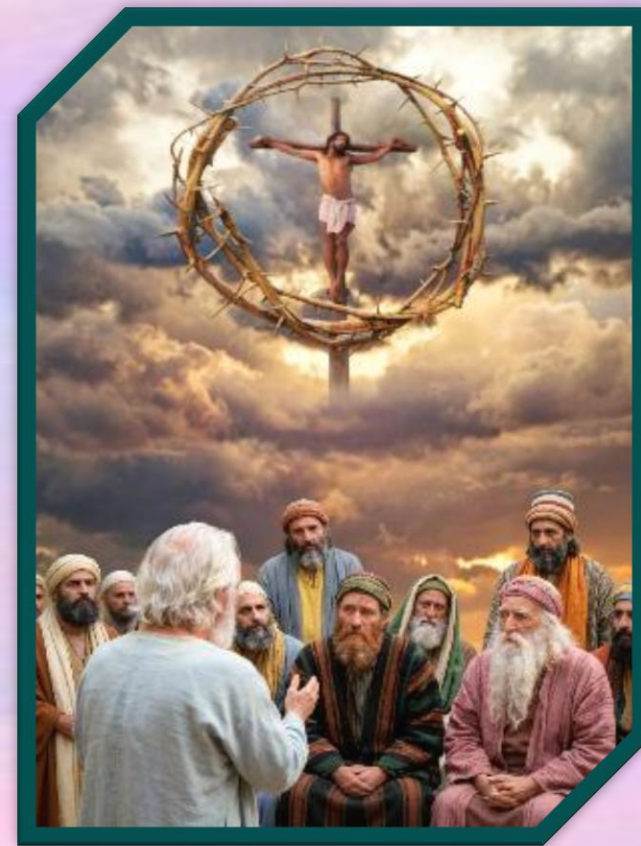
アテネでは、パウロは人間の知恵を用いて賢者たちを説得しようとしていた。しかしそれ以後、彼は神の知恵のみを用いることに決めた。

神ご自身が、彼を遣わして、「人間の知恵の言葉を用いず、キリストの十字架の力が無力なものとならないように」(I コリ1:17) 御言葉を宣べ伝えるようにされたのである。

パウロが説いた神の知恵とは何でしょうか。

神の知恵は、「知者の知恵」を打ち砕き、「賢い者の賢さ」を無に帰し(I コリ1:19)、「この世の知恵を愚かなものにした」(I コリ1:20)のである。

人間のあらゆる理屈に反して、神の知恵は「宣教という愚かさによって信じる者を救う」ことにある(1コリ 1:21)。



難しい議論は、いかに十字架の言葉を
曖昧にできてしまいますか。

イエス・キリストとその十字架の死を
宣べ伝えることが、アテネにおける
論理学、科学、哲学よりも、

なぜコリントで多くの実を結びましたか。
しかし、福音宣教において、論理学、哲学、科学
が役立つ場合もあるのではないのでしょうか。



ギリシャ語の「モリア」（狂気、愚かさ、愚行）という言葉は、『1コリント』の中で5回使われています：

「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。」 (1 コリ 1:18)

「神は、宣教という愚かさを通して、信じる者たちを救うことを喜ばれた」 (1 コリ 1:21)

「十字架につけられたキリストは、・・・異邦人にとっては愚かである」 (1コリ 1:23)

「肉に属する者にとっては……神の御霊のことは……愚かなことである」 (1コリ 2:14)

「この世の知恵は、神の目には愚かさに過ぎない」 (1コリ 3:19)

滅んでいく者にとっての愚かさ

「しかしわたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える。このキリストは、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものであるが、」 (1 コリント 1:23)



十字架は、失われた者たち、すなわち神を知らない者たち（異邦人）、この世のことばかり考えている者たち（肉的な人）、そして自分の知恵だけに支配されている者たちにとっては、愚かなもの（に映る）です。

しかし、十字架は、救われた者たち、すなわち、神の視点から十字架を見ようとする者たちにとっては、祝福なのです。

I コリント 1:20、21、23、25を読んでください。

1:20 知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。

1:21 世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっています。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。

1:23 わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、

1:25 神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

これらの「愚かなもの」「愚かな」「愚かさ」といった言葉は、パウロが「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものである」と言った意味を理解するうえで、いかに役立ちますか。

救われる者にとっての力

「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。」
(1 コリント 1:18)

十字架には、人間の最悪の部分と神の最善の部分を明らかにする力がある（1 コリ1:18）。

人間の最悪の側面

神の最善

■ 狂気

■ 力

■ 拒絶

■ 受け入れ

■ 自滅

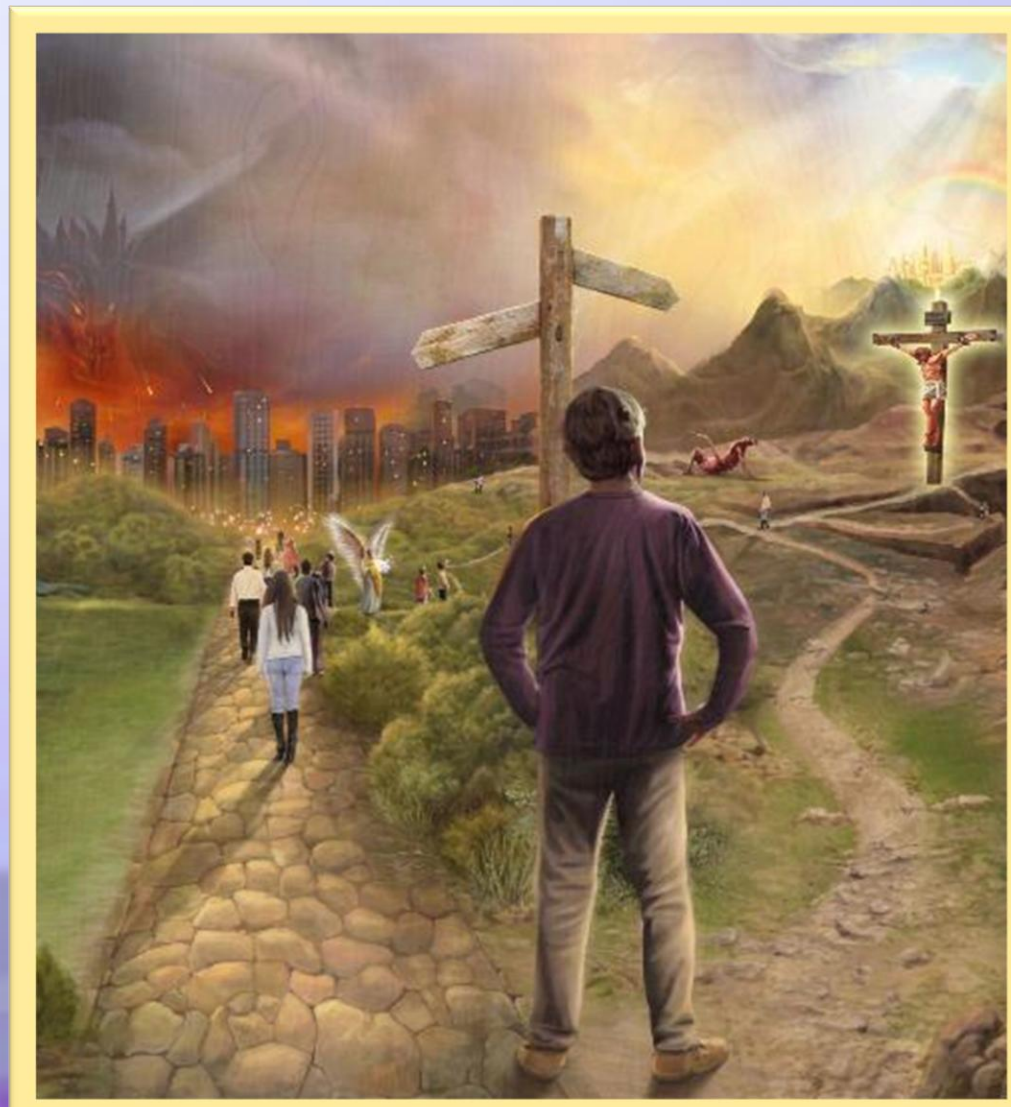
■ 赦し

■ 破滅

■ 救い

十字架を拒む者たちは、自らの過ちの報いを受け、最終的には、自分たちが拒んだ御方によって滅ぼされることになる。

十字架の上で示された神の力は、人のすべての罪を赦すことによって、人を神と和解させ、またその人に永遠の命を与えることができる（コロ1:20、1ペテ2:24）。



「罪が支払う報酬は死です。

しかし、神の賜物は、わたしたちの主
キリスト・イエスによる永遠の命なのです」

〔口語訳「罪の支払う報酬は死である。

しかし神の賜物は、わたしたちの主
キリスト・イエスにおける永遠のいのちである」〕
(ロマ **6:23**)。この聖句は、パウロが I コリント

1:18、19で述べていることを
どのように言い換えているでしょうか。

十字架につけられたキリスト



この世は、自分の知恵によって神を認めるに至らなかった。それは、神の知恵にかなっている。そこで神は、宣教の愚かさによって、信じる者を救うこととされたのである。(1 コリント 1:21)

なぜ、十字架の福音を宣べ伝えることは愚かなことなのでしょう か？ (1コリ 1:21-24)

ユダヤ人たちは、ローマの圧政から彼らを救い出すメシアを待ち望んでいた。イエスが自分は十字架にかけられると告げたとき、弟子たちでさえも恐怖に襲われた。さらに、ユダヤ人にとって、木に吊るされた者は神に呪われた者であった(申 21:23)。救い主など期待すらしていなかった異邦人にとっても、結論は同じだった。すなわち、十字架とは狂気そのものだったのだ。

しかし、天使たちにとって、十字架のメッセージはまったく異なるものでした。彼らが天国で知っていたイエスは、自分を拒絶した人類への愛ゆえに、自ら死を受け入れたのです。これこそが、パウロが説教を通じて伝えようとした視点でした。

十字架のメッセージは、私たちに救いを与えるために、神がどれほどのことをなそうとされたかを示しています。



十字架にかけられたメシアは、
ユダヤ人やギリシャ人にとって
まったく予想外のことでした。

これは、神が必ずしも私たちの期待通りに
振る舞うとは限らないという事実について、
私たちに何を示唆しているのでしょうか。

特に物事が期待通りに進まないとき、
なぜこの概念を理解することが
重要なのでしょうか。

神の力、神の知恵であるキリスト

神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからである。
(1 コリント 1:25)



神には、愚かさや、弱さがあるのでしょうか？（1 コリ1:25）

もちろん、そのようなことはありません。神には何の不完全さもないからです。パウロは単に、比喩的な比較を行っているにすぎません。仮に神に愚かな考えがあるとしても、それは人間の最も賢明な考えよりも賢いものでしょうし、神に弱い論拠があるとしても、それは人間の最も強力な論拠よりもはるかに強力なものでしょう。



最も賢明な人々から集められたあらゆる知恵をもってしても、人類を救うための計画を考案することはできない。

十字架上で捧げられたイエスの犠牲の力によって、
「救いに預かるわたしたち」（1コリ1:18）、
「信じる者」（1コリ 1:21）、そして
「召された者」（1コリ 1:24）に贖いをもたらすことができたのは、神のみです。

聖霊の呼びかけに応じてイエスを信じる者だけが救われるということに留意してください。



「人間的に見て知恵のある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄のよい者が多かったわけでもありません」

〔口語訳「人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはいない」〕（Ⅰコリ**1:26**）

について、じっくり考えてみましょう。

そこには、私たちへのどのようなメッセージが込められているのでしょうか。

現代に住む人々の心にとって、カルバリーの十字架は神聖な思い出に
つつまれたものである。キリストの受難の光景は神聖なものを連想
させる。しかし、パウロの時代には、十字架は拒絶と恐怖の感情を
もって眺められていた。十字架上で死を遂げた者を人類の救い主
として支持すれば、当然、嘲笑や反感を呼び起こしたであろう。[...]
十字架が民族を高尚にし、人類を救うことに関係があるということを
示そうとしたパウロは、知能の低い者とみなされたであろう。

しかし、パウロにとって、十字架は最高の関心をはらうべき唯一の
対象であった。[...] 罪人がみ子の犠牲の中に見られる天父の愛を
あおぎ見て、神の感化力に従うとき、心に変化が起こり、それ以後、
キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられると悟るよう
になることを、パウロは個人的な経験から知った。